

□ 書 評

東京大学医学部サーモグラフィー研究会編

「医用サーモグラフィー図譜」

大阪大学医学部教授

阿 部 裕

体温測定は診断における基本的な手法の一つとされているが、詳しく言うと水銀温度計を用いて体内深部の温度、すなわち、“核温”を測定するものである。

一方、体表の温度上昇は発熱の他、血流増加、あるいは、炎症、腫瘍の存在を、示唆し温度低下の場合は血流障害を意味するものとして古くより診断情報に用いられてきたが、有効な測定手段をもたなかったため、その変化の程度、拡がりなどを客観的にとらえることができず、主観的判断に頼らざるをえなかった。

最近、宇宙工学の開発に伴い、赤外線放射温度計の研究が進み、サーモグラフィーの技術が医学にも応用されるようになった。サーモグラフィーとは、一般に、“物体表面の温度分布を写真などの連続的パターンとして表示する方法”でこの方法によると、人体の表面に直接接触せずに、人体に何ら負荷をかけることなく、短時間に体表面の温度分布図を得ることができる。また、反復測定

により体表温の経時的変化を追及するという新たな診断情報獲得の手段が生れた。

本書は、わが国におけるサーモグラフィーのパイオニアともいえるべき、渥美和彦教授を中心とする東大医用サーモグラフィー研究会の数年間の臨床研究の集大成である。

内容は、序論、正常例および各種疾患例の三章より成り、序論では赤外線放射温度計の原理、構造の理論的解説と、撮像法の実際的な注意が記され、正常例の章では、人体各部の正常パターン、そのバリエーションおよび冷却、薬剤などの負荷に対する正常反応が示され、次章に対する基礎的知識が与えられる。

各種疾患例の章では、何より症例の豊富さ、適用範囲の広さに驚かされる。応用対象は臨床全科の、各種炎症、腫瘍、皮膚疾患はいうにおよばず、脈管疾患、妊娠、神経系疾患、リウマチ性疾患から、甲状腺疾患、腹部内臓疾患にわたって、個々の症例についてそれぞれ特異的な所見が臨床所見と対比して解説されている。

る。脈管疾患においては各種症例の典型的パターンの例示のほか、冷却負荷、薬剤負荷時の反応、さらに、交感神経節切除効果などがみごとに表示されている。このように本書の目的は、最近のサーモグラフィーの普及に鑑み“標準となるアトラス作成”にあると記されているが、その目的は充分に果されているものと思う。

もっとも、本書は症例の羅列の観がなくはない。しかし、それはこの新しい技術の若さが、現在症例蓄積の段階にあることによるものであり著者らが責められる筋合いはない。また、著者らの科学者の謙虚さが一切のスペキュレーションを避けた点はある意味で物足りない。しかしこのような生のデータの提示は、読者に討論の余地を与え、研究意欲をかきたてる効果も期待できよう。

なお若干の注文を加えれば、最近試みられているサーモグラフィーのコンピュータによる情報収集、ディスプレイ、パターン処理の問題、負荷試験の定量的解析などについての解説あるいは展望的記述も希望したいところである。

ともあれ、本書はサーモグラフィーの基本的図譜として本検査に携さわり、開発研究を志す人々に必読の書であり、また、一般臨床家にも新しい医学の動向を知るための書物として推薦したい。

B5 頁252 図137 写真235

〒170 ¥6,800 医学書院刊